



進んで社会を見つめ、自ら働きかける社会科学習 ～社会科+総合的な学習の時間 =大館ふるさとキャリア教育～

大館市立東館小学校 教諭 山本 起嗣

1 はじめに

大館市では近年、キャリア教育に全市をあげて取り組んでいる。子どもが自ら主体的に関わっていく活動が理想的であるが、総合的な学習の時間にそのような高い意識をもたせるには、単元との出あいが必要であると考えます。本校では、5年生が毎年「米作り」の活動をしているが、目的意識が薄いまま活動している場合もあったと思われる。過年度の5年生は秋田市で米の販売活動を行ったり、東日本大震災の被災小学校へ送ったりという活動をしているが、外への意識がある分、子どもたちの活動意欲は低くなかったと思われる。これらの現状を踏まえた際、社会科で日本の農業の現状をしっかりと把握し、問題意識をもたせることができれば、自ら主体的に関わっていける総合的な学習の時間が成立すると考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

(1) 研究の仮説

- ① 自分たちの身近な地域の素材を教材として扱うことにより、知りたい、調べたいという意欲が高まるのではないかと。
- ② 総合的な学習と関連させて学習することで、活動の幅が広がり、社会への働きかけを含め、公民的な資質の基礎を養えるのではないかと。
- ③ 地域人材の活用方法を工夫することにより、生きた社会に触れられるのではないかと。

(2) 研究の方法

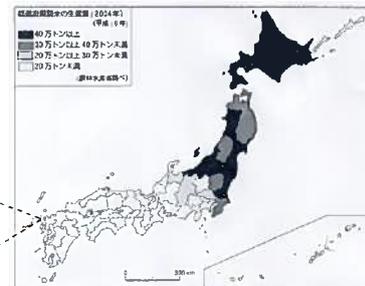
- ① 秋田県の稲作農業の教材化
- ② 総合的な学習の時間と関連させた単元計画の工夫
- ③ ゲストティーチャーの活用、シンポジウムの実施、校内外でのPR活動の実施

(3) 研究の実際

① 秋田県の稲作農業の教材化

秋田の農業に興味をもたせたり、資料活用を高めたりするための教材を開発した。また、資料を読み取ることで、新たな問いが生まれるような資料の準備に心がけた。

表題を隠して「何を表した地図か」を問うと、「降雪量」という答えが返ってくる。米の生産量だと知らせると、「なぜ、大生産地が北日本にかたよっているのか」という問いが新たに出てくる。そこで、「なぜ秋田県では米作りがさかんなのだろうか」という学習課題で学習を進めていくこととし、予想をたて、検証していくこととした。



【米の県別生産量】

資料は子どもの予想が正しいことを裏付けるもの、子どもが扱いやすいように作り直したものを準備するようになった。



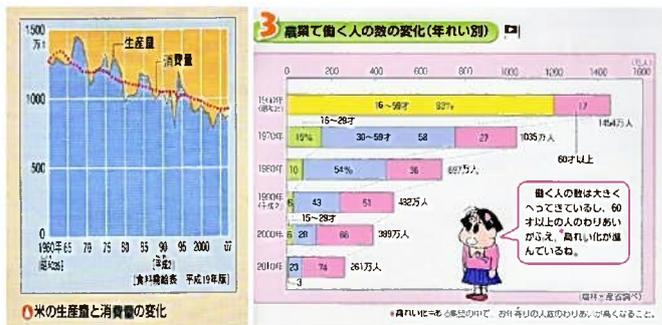
【積雪量→豊富な農業用水を想起】

資料③ 日本の主な河川(115/109) 一級河川13989 二級河川17084

主な河川(水系)	流域面積 (km ²)	延長 (km)	流量	流域	河口
1 利根川(とねがわ)	18,840	322	256	群馬県、長野県、栃木県、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都、茨城県、千葉県、東京都	太平洋(千葉県千葉市、茨城県浦安市)
2 利根川(いかりがわ)	14,330	268	400	上川支庁、空知支庁、石狩支庁	根室湾(北海道石狩支庁)
3 阿武野川(あぶのがわ)	13,781	210	451	新潟県、群馬県、福島県	日本海(新潟県)
4 信濃川(しなのがわ)	12,897	397	518	新潟県、群馬県、長野県	日本海
5 北上川(きたかみがわ)	10,150	249	391	岩手県、宮城県	日本海(岩手県宮城野宮城川、宮城県仙台市)
6 津軽川(つごがわ)	9,100	229	169	長野県、岐阜県、愛知県、三重県	伊勢湾(三重県)
7 十勝川(としかがわ)	9,010	156	203	十勝支庁	太平洋(北海道十勝支庁)
8 荒川(あらかがわ)	8,240	75	163	埼玉県、東京都、大阪府、奈良県、三重県	大阪湾(大阪府)
9 荒川(あらかがわ)	7,040	229	249	山形県	日本海(山形県)
10 利根川(てしおがわ)	5,900	256	188	北川支庁、釧路支庁	日本海(北海道釧路支庁)
11 阿武野川(あぶまがわ)	5,400	239	131	福島県、宮城県	太平洋(宮城県)
12 利根川(てんねうがわ)	5,090	213	135	長野県、愛知県、静岡県	遠州灘(静岡県)
13 利根川(おものがわ)	4,710	133	315	秋田県	日本海(秋田県)
14 利根川(よねしろがわ)	4,100	136	224	岩手県、秋田県	日本海(秋田県)
15 利根川(よねしろがわ)	3,990	128	53	長野県、山梨県、静岡県	静内湾(静岡県)
※50 子官川(こしがわ)	1,520	63	68	秋田県	日本海(秋田県)

【表中、北海道東北の河川のみを朱書きにする】

②総合的な学習の時間と関連させた単元計画の工夫



稲作農業の終末で左のグラフを使用した。今回は問題意識をもたせるための提示とし、「50年後の米の生産量はどうなっているか」「50年後の農業従事者はどれくらいいるのか」を問うたところ、「このままでは日本の農業が危ない」「なんとかしないとイケない」という意識をもたせることができた。

ここをスタートに「50年後の未来もおいしいあきたこまちを食べたい」という合言葉をもとにして、未来の農業を支えるための活動をスタートさせることとなる。

- ③ ゲストティーチャーの活用、シンポジウムの実施、校外でのPR活動の実施
- ア GTには秋田の農業の現状と課題を教えていただき、この学習から「米の消費拡大」と「就農率アップ」に向けたアイデアを考えていくことになった。
- イ 米の消費拡大と就農率アップに関するアイデアをまとめ、農業シンポジウムで基調提案をした。パネリストには市職員、JA職員、若手農業者を迎え、子ども達と意見交流を図った。これをもとにさらに考えを深め、自分たちの考えた農業応援アイデアを学習発表会で提案することとした。
- ウ これまでの学習の成果を学習発表会で発表するとともに、きりたんぼ祭りや産業祭で、学習の成果をまとめたPRちらし配りや、学校田で収穫した米の販売を行った。ここでは米の消費拡大を応援するため、米を使った料理のレシピ配りもした。また、ゆるキャラを開発し、PRに一役買わせた。



3 成果と課題

秋田県全体を教材化したことで、いかに秋田が稲作先進県であるかを把握させるとともに、秋田の農業の課題を明らかにすることができた。総合的な学習の時間と関連させたことで、明らかに活動の幅を広げることができた。子ども達は就農者が減少し続けている現状や、生産量、消費量ともに右肩下がりの現状にショックを受け、どうにかしなければならないという強烈な課題意識をもち、長い時間の総合の時間を主体的に活動することができた。多少難解な面もあったと思うが、未来の社会を担う人材の素地づくりにはなったと感じている。